えんの森『だれでも文庫』誕生

今日はデイホームえんへ行く日。 朝、「お父さん行って来ます」。夕方、満面の笑顔で「ただいま」。妻、葉子にとってさぞかし楽しい皆さんとの交流があったと思います。

ところが、この3月に腹痛を訴え精密検査の結果末期の胆管癌と診断され、3ヶ月の闘病生活の後帰らぬ人となってしまいました。えんにお世話になって1年8ヶ月の間、職員の皆様、利用者の皆様に大変お世話になりありがとうございました。

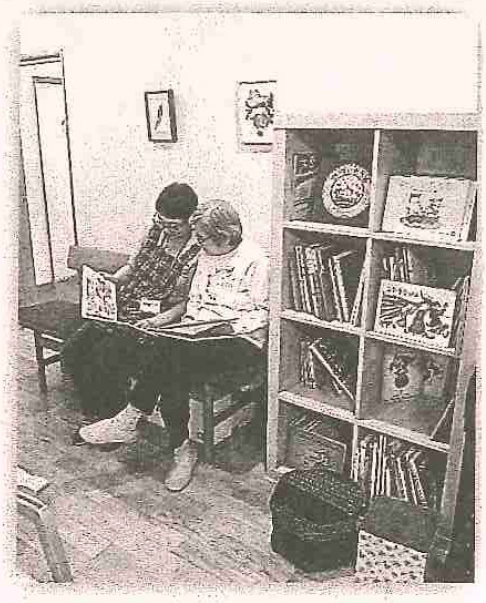
遺品として葉子が若い頃やっていたおはなし会の本、人形劇の人形が少し残っており有益に使って頂く人を探していましたところ、デイホームえんで引き取って頂けることになりました。絵本は子供に読ませる本ではなく、子供に読んであげる本と言われています。活用して頂けたら幸いです。

（元デイホームえん利用者家族／寺本豊）

ある日のだれでも食堂終了後、話し合いでのこと。「いつかここに“だれでも文庫”ができたらいいなあ」とつぶやきました。

食堂では、昔遊びや読み聞かせ、腹話術や手品など見たり聞いたり、参加したりできるお楽しみのひとときがあります。その中に絵本や児童書を置いて、読んでもらえたらとの思いでした。すると「いいね、やりましょう」とすぐに賛同の声。さらに「少し古いけどえんに頂いた本があるよ」と小島代表。こうしてとんとんとんと、あっという間に“文庫”実現の運びとなりました。

寄贈されたたくさんの本は、デイホームえんに通われていた寺本葉子さんが長年大切にされていたものでした。物語絵本を中心にのりものや自然科学もの、日本や海外の児童文学の名作も揃って本棚はいっぱいになりました。



子どもも大人も、赤ちゃんからお年寄りまで、面白くて役にたつ一冊が、きっと見つかりますよ。

（ボランティア／山田弘子）

亡くなられた寺本葉子さんのご主人の思いが、ボランティアの山田さんによって子どもたちへつながりました。寺本さんとはたくさんの時間を共に過ごし、多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。

（デイホームえん／三輪絵美子）